

福祉の総合専門誌

月刊福祉

12

December
2024

Monthly Welfare

■特集 **更生保護と地域福祉をつなぐ**





社会福祉法人北摂杉の子会
理事長 松上 利男さん

京都産業大学卒業。就労支援施設で指導員として勤務後、1989年より社会福祉法人京都杉の子会理事、京北やまぐにの郷施設長を経て、社会福祉法人北摂杉の子会の設立に参画。1999年、生活施設萩の杜を開設し、常務理事・施設長に就任。現在は理事長として運営に携わる。公益財団法人日本知的障害者福祉協会で人材育成・研修事業に尽力。一般社団法人大阪知的障害者福祉協会会長、一般社団法人全日本自閉症支援者協会会長。一般社団法人日本発達障害ネットワーク理事。国の研究事業「強度行動障害支援初任者養成研修プログラム及びテキストの開発」や虐待防止の体制づくりを担う。

松上さんが福祉の道を志したのは学生時代。視覚障害のある学生との出会いを機に視覚障害者の学習支援サークルへ入り、既存の福祉サービスや社会的差別の課題を学んだ。障害児が暮らす施設でボランティアをしたり、障害のある若者の入学を大学に願ひ出たり、差別と闘う活動にもめり込んだ。就職活動中、京都市が運営する学童保育施設の採用試験に応募した。面接で「障害のある子どもに携わりたい」と伝えると、障害のある人の就労支援をする社会福祉法人なづな学園を紹介された。「当時の施設は以上に人材不足でした。給料は安いですがすぐに来てほしいと言われ、働こうと決めました」

大学を卒業した1973（昭和48）年に京都市かしの木学園に就職。かしの木学園は、お寺で参拝者が厄よけ祈願で行う「かわらけ投げ」の素焼き皿を作る仕事や、縫製などを通じた就労支援をしていた。松上さんは退職した

創る

FUKUSHIを

ニーズや社会・地域課題を前にし、それに対応するため、新たな発想や視点をもとに、これまでにない実践に取り組んだ中心人物に焦点を当てます。

(第20回)

一人ひとり異なる「強度行動障害」 特性を理解し地域で暮らす好循環をつくる

自分を傷つけたり、物を壊したりなど、多くの行動的課題のある人やその家族と向き合ってきた、社会福祉法人北摂杉の子会理事長の松上利男さん。関西を拠点に、一人ひとりの障害特性に配慮した住環境を整備し、日中活動や余暇の支援をしながら地域での暮らしの充実につなげてきた。福祉の中でも支援が難しく敬遠されがちだった領域に挑戦し実績を積み重ね、障害の研究と人材の育成にも力を注いでいる。そんな松上さんが考える支援者に必要な感性と創造力とは。

残された福祉の課題 強度行動障害のある人への支援

自分を傷つける、周囲の人をたたいてしまう、パニックになって大声を上げる、急に飛び出すなど、周囲の人の暮らしにも影響を及ぼすこれらの行動が高い頻度で起こり、特別に配慮された支援が必要な状態を「強度行動障害」と呼ぶ。1988（昭和63）年に開かれた「行動障害児（者）研究会」で命名され、先天性の障害ではなく、周囲の対応や環境にストレスや不安を感じて引き起こされる状態とされる。

行動障害関連の福祉サービスの利用者の数は全国に延べ6万8000人以上と言われ（2021（令和3）年10月時点）、支援が難しいため、対応に苦慮した施設では職員の休職・退職、身体拘束や虐待につながる事例もある。施設から受け入れを断られ、本人や家族が孤立するケースも少なくない。

強度行動障害のある人やその家族と向き合い、現場の実践に基づく支援を生み出してきたのが、関西を拠点に障害のある人を支援する北摂杉の子会理事長の松上利男さんだ。「特性に基づく適切な支援を含めた環境を整えることで状態は改善できる」。一人ひとり異なる障害の特性を理解し、適切な支援を実践してきた松上さんの言葉は、強度行動障害のある人やその家族、支援者らに希望を与えている。

「利用者の立場に立つ」が まだ当たり前ではない時代に

陶芸家に代わり慣れない陶芸の作業をサポートしながら、利用者の工賃向上をめざし新しい仕事の開拓に尽力した。働き始めて3か月後、京都市から「スイスのチューリッヒ市との交流事業で社会福祉法人を設立するから、そこで働いてほしい」と請われ、転職。転職先の京都市のぞみ学園は、知的障害のある人が通う就労支援施設だった。

平日中の作業をサポートしながら、松上さんは利用者のひとりから「3か月間お風呂に入っていない」と聞き、ほかの利用者も誘い銭湯に通い始めた。脊椎カリエスの後遺症で背中が曲がり、銭湯に行くところ見られて恥ずかしかつたと聞いた。久しぶりに入浴できたと大声で話す男性の笑顔を見ながら、松上さんは「地域の中で暮らせるように生活面での支援も必要」と考えた。そして、週末に自宅を開放する。家と施設を往復するだけだった暮らしを、点から線、面へと広げようと、み



京北やまぐにの郷ではミニチュアホースの牧場でグループ就労を実施



京都市のぞみ学園で始めた空き缶処理作業



松上さんの結婚式披露宴。京都市のぞみ学園に通う利用者も招待した

などで買い物をしたり料理をつくったり、「余暇」や「体験」を増やす支援を始めた。障害のある人の立場に立った支援が当たり前ではなかった時代、公私を分けることなく一人ひとりに寄り添う活動を続けたのだ。

また、施設で働き始めて2年がたった頃、「一度も結婚式に行かなかったことがない」という利用者の声を聞く。障害があることで隠されるような扱いを受けてきた彼らの悲しみと差別の現実を垣間見た気がした。そこで体験を増やす取り組みの延長として、自身の結婚式に彼らを招待した。「みんなから歌やメッセージが寄せられ思い出深い結婚式になった」と振り返る。

「社会に溶け込むことこそ幸せ」 池田太郎氏の教えに学ぶ

京都市のぞみ学園を運営する京都国際社会福祉協力は、1973年に京都国際社会福祉センター（以下、セン

テ担うと提案。京都市が全国に先駆け空き缶の再資源化条例を打ち出したタイミングと重なり、松上さんの事業提案はすぐに採用された。メディアでも取り上げられ、全国の自治体や福祉施設の職員らが視察に訪れるようになる。日頃から「自らの役割は新しい仕事の開発」と考えていた松上さんは、ほかにも神社の巫女やミミズ養殖などさまざまな仕事づくりに挑戦。特性に合った仕事を通じて利用者の社会参加がすすみ、目標の工賃倍増も実現した。

38歳で知った「強度行動障害」 根拠ある支援で症状が緩和

そんな松上さんが初めて強度行動障害のある人に出会ったのは、1989（平成元）年。社会福祉法人京都杉の木会が運営する京北やまぐにの郷（以下、やまぐにの郷）に呼ばれて行ってみると、顔をたたいて失明しかけたり衣服を破いたり、症状の強さに驚い

ター）を設立し、人材育成や研究に力を入れていた。松上さんは夜間にセンターの研修へ参加し、対人援助の基礎から発達障害への支援方法など、多様な知識を学び実践に活かした。著名な専門家から教わる機会も多く、特に印象深いのは近江学園の創設に携わった池田太郎氏だ。「信楽青年寮」を発足させ、知的障害者の支援に尽力された先駆者である。「私が訪ねていくと、信楽青年寮の実践を熱心に語ってくれました。障害のある人たちの幸せは、個々の強みを活かして価値ある仕事をしながら地域の人に認めてもらい、社会に溶け込むことだと教わりました」

また、センターの国際交流事業を通じて、松上さんはスイスの障害者労働センターでの3か月の研修を受けた。なかでも空き瓶リサイクルの作業の様子は、その後の事業運営のヒントになった。帰国後、空き缶の選別・圧縮など京都市の再資源化処理を福祉事業とし

た。やまぐにの郷は強度行動障害のある子どもの親たちが設立した施設で、施設長が辞めてしまい困っていた。

「誰かがやらなければつづけてしまう」と懇願され、松上さんは戸惑いつつも「5年で立て直そう」と施設長に就任。これまでの経験を総動員し、まず一人ひとりの特性を理解することから始めた。モットーは池田先生から教わった「利用者にとって意味のある支援」。1日の始まりに行っていた朝礼をやめ、50人の集団生活から10人のユニットに分けた。各グループに担当職員を固定し、それぞれの発達の状況を把握しながら個別のアセスメントを基本とした支援をめざした。日中活動は散歩とランニングが中心であったが、利用者の強みを活かした意味のある仕事など日中活動の充実に取り組んだ。グループ就労を最初に受け入れてくれたのが、ミニチュアホースの牧場だ。クリスマスプレゼントの申し出に来た



言語によるコミュニケーションが困難な人とは「PECS」(絵カード交換式コミュニケーションシステム)も活用し意思疎通を図る。こうした試行錯誤を続けてきた



北摂杉の子会が運営するグループホーム「レジデンスなさはら」。最重度の行動的課題のある人が利用する



北摂杉の子会の「萩の杜」では、小グループでの外出の機会を積極的に設けた

牧場のオーナーに「仕事がほしい」と願ひ出て、放牧場の整備や馬房の掃除を任せてもらった。「最初は不安だった」というオーナーと信頼関係を築き、「今やなくてはならない存在」といわれるほどに。ほかにも木工や織物、農業など地域の協力を仰ぎながら多様な仕事を生み出した。いずれも特性に合わせた時間配分や作業、環境づくりを徹底した。その結果、強度行動障害の症状である自傷や他傷などが減った。そのデータを分析して発表すると、全国から視察や講演依頼が相次いだ。

その頃、アメリカから帰国した佐々木正美教授のTEACHプログラムを受講した。その理念と障害特性への理解とアセスメントに基づく支援、地域で暮らすために一人ひとりに応じた環境提供の重要性を学んだ。

**構造化された環境の中で
自尊心をもって暮らせるように**

対応できるチームをつくり、構造化された環境を整えた。そして、自尊心を保ちながらひとりで行える活動を増やし、地域で継続的に生活できる体制づくりをすすめた。取り組みは一定の成果を上げ、利用希望者も多い。

障害のある人の地域移行は、国連障害者権利委員会から改善を求められるように依然として課題であるが、「その人の暮らす地域の中での広がり、社会参加の機会をつくっていくことが必須です。場づくりとよく言われますが、障害のある人が当たり前にいる場をつくっていくことこそ重要です」と話す。

**組織運営のカギは人材育成
共生社会の道をひらく**

松上さんは、国の研修事業や教材の開発、障害特性の研究で重要な役割を果たし、2022(令和4)年に始まった厚生労働省の「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」

「やまぐにの郷みたいな施設にわが子を住ませたい」。大阪府高槻市と茨木市の保護者たちから依頼され、1998(平成10)年、高槻市に北摂杉の子会が発足。「地域に生きる」を理念に掲げ、翌年には「萩の杜」を開設した。利用者の約8割が重い知的障害をとまなう自閉スペクトラム症で、やまぐにの郷での実践を継承して「職住分離」と「ユニットケア」を軸に、日中の活動の場を施設外に複数設けた。

また、支援は「地域とのつながりの中で行う」ことを基本として、余暇支援の充実に取り組んだ。ニーズベースの小グループによる外出や旅行などの支援をすすめている。

グループホームでの支援が本格化したのは2006(平成18)年に大阪府の委託で実施した「地域移行支援センター事業」から。強度行動障害のある人の暮らしのニーズに応えるために、利用者の特性を踏まえながら一貫してでも構成員を務めている。強度行動障害のある人の支援には、建物の環境整備と医療との連携、事前のアセスメントに加え、「支援スタッフの専門性」が重要だと強調してきた。

「35年以上にわたり強度行動障害のある人の支援をしてきましたが、ようやく強度行動障害に関する支援の方向性がまとまり国会でも議論され、具体的に動き出したと感じています。行動障害は障害のある人の課題ではなく、支援者側の支援の課題。支援者が研修で学んだことを施設や地域で具体化することが求められます。そこですます重要なのが人材の育成です」

誰もが安心して地域の中で暮らせる居場所をつくり、共生社会への道を模索してきたが、まだ道なれば。もっと多くの人が自立的に尊厳をもって生きられる社会の実現に向けて、松上さんの挑戦はこれからも続く。